

# 大学生の部活動・サークル加入の有無による大学生活の満足度の違いについて

B33056 志村直樹

## 【研究史】

大学の退学率という身近な指標に注目し、現代の大学生がどのような立場に置かれているのか考えてみたい。入学試験に合格し、高額な入学金を払い大学へ入学したうえで大学生活に満足感を感じている学生が多くいるのに対し、卒業を待たずに中途退学してしまう生徒もいる。文部科学省統計（2014）によると2012年度の中途退学は2.65%と増加傾向にあり、その理由は経済的理由、転学、学業不振、就職が上位を占めていることが報道されている。しかし根本的に大学生活が充実していれば退学したいと思うこともないだろうし、仮にそのような状況に追い込まれてもどうかして大学へ在学しようと思うのではないか。武内・浜島（2003）によればサークル活動に打ち込んでいる大学生はそうでない学生よりも、自己を肯定的に認識しているという結果が見出されている。また、宮下・大野（1998）によればサークル活動に打ち込んでいる大学生はそうでない学生よりも、アイデンティティの確立の程度が高いことが見出されている。

## 【目的】

本研究では部活動・サークルに焦点を当て、学内の部活動・サークルに加入している者と加入していない者で学生生活や大学の設備や環境に対しての満足度に違いがあるのか比較し、部活動・サークル加入の有無による生きがい感や大学生活に対しての満足度に差はあるのか検討していく。学内部活動・学内サークル加入の方が学内部活動・学内サークル未加入者より生きがい感を感じている。大学生活に対して満足しているという結果ができた場合、新入生に学内の部活動や学内サークルに加入することを勧め、大学生の全体的な満足度が上がり大学の中途退学者の人数が減少することが見込まれる。

## 【仮説】

- 仮説1「大学内の部活動・サークルに加入している者は生きがい感を感じている」
- 仮説2「大学内の部活動・サークルに加入している者は今の生活に満足感がある」
- 仮説3「大学内の部活動・サークルに加入している者は大学生活に対する満足度が高い」

## 【方法】

関東地方の文化系私立大学の「教育心理学」を受講している学生112名を対象とし、調査対象の学生に作成した質問紙への回答を求めた。「学生生活についての調査」という題名のもと、生きがい感スケール、学生の大学生活に対する満足度を測定する項目、の二つの尺度とフェイス項目で作成。全46項目で構成されている。

## 【結果】

### 結果1

仮説1「大学内の部活動・サークルに加入している者は生きがい感を感じている」という仮説を検証していく。生きがい感をどの程度感じているかの平均と標準偏差を部活動・サークル加入者と未加入者で分けて示したものが表1、である。表が示すように、部活動・サークル未加入者より加入者のほうが生きがい感が高いことがわかる。そこでt検定を行い部活動・サークル加入者、未加入者の平均生きがい感の差を検討したところ、有意な差が認められなかった ( $t(110) = 1.77, n.s.$ )。すなわち「大学内の部活動・サークルに加入している者は生きがい感を感じている」という仮説は支持されなかった。

	人数	平均	標準偏差
部活動・サークル加入者	65人	2.2	0.40
部活動・サークル未加入者	47人	2.0	0.41

### 結果2

仮説2「大学内の部活動・サークルに加入している者は今の生活に満足感がある」という仮説を検証していく。大学内の部活動・サークルへの加入の有無と今の生活への満足感をどの程度感じているのかのクロス集計表は表2の通りである。大学内の部活動・サークルへの加入の有無と今の生活への満足感をどの程度感じているのかの関連があるかを検討するため、 $\chi^2$ 検定をおこなったところ、大学内の部活動・サークルへ加入している者のほうが

今の生活に満足感があるという関係が認められた ( $\chi^2(3)=7.98, p<.05$ )。すなわち「大学内の部活動・サークルに加入している者は今の生活に満足感がある」という仮説は支持された。

### 結果3

仮説3「大学内の部活動・サークルに加入している者は大学生活に対する満足度が高い」という仮説を検証していく。満足感をどの程度感じているかの平均と標準偏差を部活動・サークル加入者と未加入者で分けて示したものが表3である。表が示すように、部活動・サークル未加入者より加入者のほうが大学生活に対する満足度が高い。そこでt検定によって部活動・サークル加入者、未加入者の平均感の差を検討したところ、有意な差は認められなかった ( $t(110)=0.94, n. s.$ )。すなわち「大学内の部活動・サークルに加入している者は大学生活に対する満足度が高い」という仮説は支持されなかった。

表2 大学内の部活動・サークルへの加入の有無と今の生活への満足感指数のクロス集計表

今の生活への満足感	大学内の部活動・サークルへの加入の有無		計
	加入している	未加入	
ない	10人 (8.93%)	17人 (15.18%)	27人 (24.11%)
どちらでもない	25人 (22.32%)	18人 (16.07%)	43人 (38.39%)
ある	30人 (26.79%)	12人 (10.71%)	42人 (37.50%)
計	65人 (58.04%)	47人 (41.96%)	112人 (100.00%)

表3 部活動・サークル加入者、未加入者別、大学生活に対する満足度の平均と標準偏差

	人数	平均	標準偏差
部活動・サークル加入者	65人	3.4	0.53
部活動・サークル未加入者	47人	3.2	0.69

### 【考察】

先行研究では、生きがい感や大学生活に対する満足度に有意差が認められたが、本研究では有意差はほとんど認められなかった。本研究での生きがい感についての検証や大学生活に対する満足度についての検証に共通して言えることは、サンプル数の偏りである。また、本研究では学内の部活動・サークル加入の有無を問う際に活動頻度は問わなかった。そのため、ほとんど有意な差が認められなかったと考えた。

また、今回、学年のサンプル数で一番多かったのは1年生だった。1年生は、上級生である3年生、4年生に比べると、まだ大学生活に不慣れな側面が多く存在する。藤竹暁(2000)によれば、「居場所」とは、個人にとって強い情緒的な結びつきや意味をともなった空間のことをあらわすという。このことから一年生に比べて長い期間大学に在籍している3年生、4年生のほうが居場所を強く感じ、それが生きがい感や大学生活に対する満足度につながっていると考えられる。1年生に比べて長い期間大学の友人と関わっている3年生や4年生の方が生きがい感や大学生活への満足度が高まると考えた。今回の研究の各学年のサンプル数が均等であれば、有意のある差が認められたかもしれない。

### 【参考・引用文献】

牧野幸志・森裕紀子(2002). 大学生活への満足度に関する教育心理学的研究 —学生は大学に満足しているのか?—

近藤勉・鎌田次郎(1998). 現代大学生の生きがい感とスケール作成 発達心理学研究 11, 73-82

白井利明(2006). よくわかる青年心理学 ミネルヴァ書房 22-149

大野久(2010). エピソードでつかむ青年心理学 ミネルヴァ書房 147-184

武内清・浜島幸司(2003). キャンパスライフの今 武内清(編) 玉川大学出版部 73-90

藤竹暁(2000). 現代人の居場所 至文堂 47-57

宮下一博(1998). 青年の集団活動への関わり及び友人関係とアイデンティティ発達との関連 千葉大学教育学部研究紀要 46, 27-34